

ウクライナは、再び同じものであることはできない

Konrad Rekas

Global Research, February 27, 2022

ウクライナで起きていることは、深刻な、地政学的な意味合いをもっている。それは第三次大戦シナリオにつながっていく可能性がある。

平和の過程は、エスカレーションを防止するという目的をもって始められることが重要である。

[Global Rereach は、ロシアのウクライナ侵略を支持はしない。2 方向的な平和合意が要求される。]

まず最初に、現在の情勢において、真剣さを要求しよう——騒ぎではなく。今この時期は、空疎なジェスチャーや、泣かんばかりの「連帯宣言」の、時でも場所でもない。責任あるリーダーシップが、特定の事柄を強調しなければならない。いかにウクライナ-ロシア紛争のエスカレーションを、防止するだけでなく、その範囲をどのように制限するかが大切である。もう一つ別の問題は、ウクライナの政治的再建（あるいは多分、その崩壊）と、我々の目の前で形作られる、新しい国際的秩序を、自分がどう考え、どうこれに立ち向かうかである。

シチリアの防衛

我々はまた、ウラジミール・プーチンのような政治家が——もし彼がそれを強制されたのでなければ——このような決然とした行動を、決して取らなかったであろうということを、十分に知っておかなければならない。(強調訳者)

そしてこれは、誰かの「罪を許す」というような問題ではない。政治はそのようなコンセプトを認めない。単純に言って、本物のプーチン大統領（メディアによる彼のカリカチュアでなく）は、防衛的戦略の象徴のような人物である。彼はクツーツフの末裔で、決してスヴォーロフではない。(訳者：ミハイル・クツーツフは、トルストイの『戦争と平和』に出てくるロシアの将軍。私事だが、私自身も前からこの2人を重ね合わせていた。アレクサンドル・スヴォーロフもロシアの将軍だが、私は知らなかった。)

この命令は、ロシア側が、予測される敵の攻撃について信頼できる情報を得たときに、初めて発することができる。そしてそれは、ドンバスに対してだけでなく、おそらくソシア連邦そのものに対してである。ウラジミール・プーチンは、これが絶対に、…防衛の唯一の形であるときにだけ攻撃する。そしてロシア軍が、再び、モスクワからほんの数マイルの所で自分を防衛したり、レニングラードの人々の食料をどうするか悩んだりしないで——（ウクライナ第2の都市）ハリコフ近くに上陸するのを選んだのは、驚くべきことではない。

もちろん、おそらく他の要因や懸念があったであろう。過去数か月に及んで、アメリカと、特にイギリスが、あからさまに奨励し、ほとんどロシアに、侵略を強制しているという印象は、ぬぐい難いものがあった。そしてこれには、すべて、ロシアがドンバス問題への交渉の試みに戻ろうとするのを、あきらかに拒否する態度があった。それは、キエフによって事実上、破棄されたミンスク合意書に、本当の形を与えることだった。その一方で、ボロジミール・ゼレンスキー大統領は、本来の職業（コメディアン）ということもあって、カメラの鏡に向かっているときは、人は3度、「プーチン！ プーチン！ プーチン！」と言ってはならないことを、覚えておくべきだ。なぜなら、願いが実現し、呼ばれた人がやってくるかもしれないから…

大人しいロシア人をなめてはならない！

キエフの臨時政府（クーデタ政府）は、「オオカミだ！ オオカミだ！」とあまり何度も叫んだために、誰もそれを本気にしなくなった。もちろん、メディアのプロパガンダは別として。こうして、6か月に及ぶロシアの侵略の脅威が、自己実現予言の力を得て現れた。

しかしウラジミール・プーチンは、はっきりと、公然と、ロシアの立場を公的に現した。ミンスク合意書への西洋人の無関心、すなわち、ウクライナの平和的な奪ナチ化と連邦化の拒否に直面して、ロシアはもう一つ別のライフラインを、反対側に投げた。

ドンバス人民共和国の主権（統治権）の承認は、はっきり、ロシアの勢力圏を線引きした。それは、モスクワに対する非難を考えて、実に用心深いものであることを認めよう。

これを尊重しないこともまた決定された。「プーチンが逃げていく！ プーチンは終わった！」と、彼らは叫んだ——ロシア大統領が、実はまだ、事を初めてもいないにもかかわらず。メディアの攻勢もまた、明らかなメッセージによって強化された：—「自己弁護するようなことはするな、我々は、お前がそれを始めたのだと言うだろう！」まあ、ずばり

言おう。これはロシアをなめてかかるゲームだった。そして、すでに数月前に私は、プーチンは最初に逃げるような男ではないと言った。

そこで、どっちにせよ、ロシアは制裁をかけられているのだから、どっちにせよ、ロシアは厚かましさと侵略を（何もしないのに）非難されているのだから、そして西洋の次のステップは直接の攻撃だと考えれば——先制攻撃がただ一つのオプションだった。これ基本的なことだ——経費が同じで、遅延が致命的だとすれば。

どんな平和？

実際には、ウクライナ-ロシア紛争自体は、我々自身には関りのないはずのことだ——その可能性ある結果に対比して。もちろん、隣人たちの自然な立場は、自分たちの国境から問題を遠ざけて、なるべく早くすべてを解決することだ。

これが、再びミンスク会議を提案して、ベラルーシがやっていることである。

また西洋でも、例えばフランスでは、緊急の NATO-ロシア会談の必要を言う声がある。（大統領選挙に出馬しようとする Eric Zemmour は、この問題にフランスの主導権を支持し、もちろん、ロシア介入に対する儀式的非難をつけ加えている。）

ハンガリー首相の Victor Orban もまた、バランスのある立場をとっている。不幸なことに、我々に確信がもてることは、ポーランドやリトアニアに導かれた、アメリカの中央ヨーロッパ従僕国たちは、理性の道に従うことなく、意味のあるどんなことも提案しないことである。その代わりに彼らは、証明されたアピール、召喚、演説、スクリーン画像、FB 軍用地図、金切り声の、兵器庫を見せるだろう。

そしてまた納税者のカネを使って、崩れていくナチ-寡頭政治ウクライナ国の、政策を支持している。

一方、ロシアの介入の結果とは関係なく、ウクライナはもはや、今までと同じであることはないだろう。

我々はまだ、プーチン大統領によって宣言された、脱ナチ化の規模も想定も知らない。

しかし、もし我々がそれを真剣に受け止め、ロシア軍の存在がそのような宣言に真剣さをつけ加えるならば、ロシア人たちは、第二次大戦の時と同じように、他のヨーロッパ人のために、汚い仕事の全体を再び引き受けるだろう。



なぜなら Nati Banderites（ナチ右翼組織）をウクライナから取り除くことは、異論の余地なく、共通の利益だからである。

我々はまた、この作戦の想定された軍事的領域が、どうであるかを知らず、ウクライナ国の全体が、その現在の国境の内部にあると、想定されているのかも知らない。

しかし中でも特に、「今はウクライナから何かを要求する時ではない」と繰り返す者は誰であれ、**裏切り者**か愚か者であることを、覚えておかななくてはならない。今こそ、ウクライナの脱ナチ化を要求し、アメリカの生物・化学兵器ラボの追放、遺伝子組み換え生物の禁止、ワシントンで働くテロリストのブラックリスト、その他のアメリカのゴミを、要求する時である。不幸なことに、我々は誰もそれをやらないことを知っている——もちろん、今それをやろうとするロシアを除いて。

もし脱中央集権化された、連合政府の、そして中でも、脱ナチ化されたウクライナが創られるならば、民族的少数派は、彼らの言葉の権利を取り戻し、ナチのシンボルは公共の場から消え、そして貧困と絶望が、ウクライナ人にとって、毎日の戦いであることをやめよう。

【訳者 Greatchain より】

ウクライナの本当の事情を内部から説明するこの論文と、もう一つの「ウクライナのナチズムを理解するために」を、併せ読んでいただくことを、特に日本政府の方々にお願い

いしたい。プーチン大統領がこのような行動を取ったからと言って、「ああやはり、我々の支持するバイデン氏が正しかった、プーチンが間違っていた、プーチンを徹底して懲らしめよう」と言って、うれしくなるような問題でないことがわかるだろう。間違っはならない。バイデンは悪の道をつっ走っている。プーチンは人類を滅ぼす New World Order と戦っている。こういうことが起こったことによって、バイデンが正当化されるとは、常識ある誰もが考えない。もう一つの Global Research 論文は、「アメリカは、ウクライナで撒いた種を刈り取っている」と言っている。

2014年のクーデタ以来、何が起こっていたかが、ほとんど知られていない。このときに追い出されたヤヌコヴィッチは、正当な選挙による大統領だった。ウクライナにおけるネオ・ナチの跋扈は、腐敗した不正な政権と一つのものである。それは不正選挙によるバイデン政権と同じである。それ以来、ワシントン政府のビクトリア・ヌーランドという女性が、汚い画策をしてウクライナを陥れようとした。そのときに漏れた秘密電話が、録音さえされている (Fuck the EU というセリフが有名になった)。そのときのウクライナ大統領はポロシェンコだったが、彼は腐敗の代名詞のように言われ、汚職で地位を追われた。そして日本の安倍さんが、何者かに命令されて、このポロシェンコ会いに行くとい屈辱的な事件があった。私はこのとき、新聞が平気でそれを書くなら、「韓信の股くぐり」の故事を、密かに載せたらどうだと言った。果たして、バイデンとポロシェンコが仲良く写っている写真がある。日本国民は、こういう腐った者たちにへつらうほど、またワクチンの姦計を知りながら黙認するほど、情けない国民ではないはずである。